

Title	展開の一つの証明
Author(s)	伊藤, 秀美
Citation	物性研究 (1976), 26(6): 263-272
Issue Date	1976-09-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/89217">http://hdl.handle.net/2433/89217</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## Ω 展開の一つの証明

京大理 伊藤 秀美

### §1 序

開いた系の性質はその系の確率分布の運動を記述する方程式、具体的にはたとえばマスター方程式なるもので調べることが通常なされる。この方程式自体は昔 van Hove<sup>1)</sup>がいわゆる weak coupling limit (系と外界の結合定数  $\lambda$ , 時間  $t$  とした時, スケールした時間  $\tau = \lambda^2 t$  で  $\tau$  を固定,  $\lambda \rightarrow 0$  とした極限) で導びいた。最近では Davies, Pulè<sup>2)</sup> がその基礎づけを行なっている。

さてこのマスター方程式が (物理的には系が一様であるという仮定のもとに) 特に簡単な形をとるとき, (簡単のため次元, 定常)

$$\frac{\partial}{\partial t} P_{\Omega}(x, t) = \Omega \int_{-\infty}^{\infty} dr \{ w(x - \varepsilon r, r) P_{\Omega}(x - \varepsilon r, t) - w(x, r) P_{\Omega}(x, t) \} \quad (1)$$

( $\Omega$  は系の大きさをあらわすパラメタ,  $\varepsilon = 1/\Omega$ ,  $x$  は intensive variable )

$\Omega \rightarrow \infty$  の極限で平均値  $y(t)$  に対しては

$$\dot{y}(t) = C_1(y(t)), \quad (2)$$

ゆらぎ  $\zeta = \sqrt{\Omega}(x - y(t))$  に対しては

$$\frac{\partial}{\partial t} P_{\infty}(\zeta, t) = \left\{ -\frac{\partial}{\partial \zeta} C_1^{(1)}(y(t)) \zeta + \frac{1}{2} \frac{\partial^2}{\partial \zeta^2} C_2(y(t)) \right\} P_{\infty}(\zeta, t) \quad (3)$$

が成り立つ。ここで

$$C_k^{(n)}(y) = \frac{d^n}{dy^n} \int dr r^k w(y, r). \quad (4)$$

この事実は最初 van Kampen<sup>3)</sup>, 後に Kubo et al.<sup>4)</sup> が指摘した。

しかしながら両者のニュアンスには少しく違いがあるように思われるのでこのことを, 少し脱線して量子力学と古典力学との対応を例に引いて, まず示そう。

伊藤秀美

量子力学で  $\hbar \rightarrow 0$  とすると古典力学に移行することは量子力学の教科書に書いてある。通常は波動関数  $\psi$  に対して

$$\psi = ae^{is/\hbar}$$

とにおいて Schrödinger 方程式にぶちこんで、 $\hbar$  のべきに展開整理して Hamilton-Jacobi の式が出て…という具合になっている。これはどちらかというとな波動関数自身を大切にす立場である（立場 A と呼ぼう）。さて今一つの立場があって波動関数の形（有限時間後の）はそれほど問題にしないが、オブザーバブルの期待値自身が  $\hbar \rightarrow 0$  の極限で古典力学の結論に移行することを重んじる立場（立場 B と呼ぶ）である。B の方が具体的と云えよう\*） A の方は観測量とむすびつけようとする Saddle point method 的な考えになり、基礎づけに際してその辺がややあいまいになるうらみがある。A の基礎づけはたとえばマスロフ<sup>6)</sup> に書いてあり、B について最初にはっきり述べて証明を与えたのは Hepp<sup>7)</sup> のようである。

さてここで話をマスター方程式 (1) にもどす。  $\hbar$  と  $\varepsilon = 1/Q$  が対応していることは明らかで、量子力学との違いは群か半群かという点にあるのみである。Kubo et al. の立場は  $P = e^{Q\phi}$  とおくから A の立場であり、この立場に立って基礎づけを試みたのが Suzuki<sup>8)</sup> である。一方 van Kampen や Tomita グループ<sup>9)</sup> による応用例では、平均値、分散などをそのままあつかうので B の立場といえる。そこでこの小論では立場 B からの基礎づけを行うことにする。§2 が定理と議論 §3 が証明。

なおこの定理の事実は Hepp の講義ノート<sup>10)</sup> に証明抜きでふれてある（条件の詳細不明）ことをことわっておく。

## §2 定理と議論

<定 理>

初期条件として ( $y \in \mathbb{R}^1$ )

$$P_Q(x, 0) = \sqrt{Q} \rho(\sqrt{Q}(x-y)) \quad (5)$$

---

\*）因みに Schiff の教科書<sup>5)</sup> では「…適当な極限移行によっていかなる計算結果も古典的記述と一致することを要請する。この要請は、Bohr の対応原理を表わしている…」（下線部筆者）

ここで

$$\rho(x) \geq 0 \quad \int \rho(x) dx = 1 \quad (6)$$

方程式 (2) と (3) の解  $y(s)$ ,  $P_\infty(\zeta, s)$  (初期条件  $y(0) = y$ ,  $P_\infty(\zeta, 0) = \rho(\zeta)$  とする。積分核  $w$  についてはある連続関数  $g(r)$  が存在して

$$\left| \frac{\partial^j}{\partial y^j} w(y, r) \right| \leq g(r) \quad \int |r|^i g(r) dr < \infty$$

$$0 \leq i \leq 9, \quad 0 \leq j \leq 3 \quad (7)$$

を満たすものとする。さらに ( $0 \leq s \leq t$ )

$$\int d\xi \left| \xi^k \frac{\partial^\ell}{\partial \xi^\ell} P_\infty(\xi, s) \right| < \infty \quad 0 \leq k, \ell \leq 3 \quad (8)$$

を仮定する。このとき任意の有界で連続な関数  $f$  に対して

$$\lim_{Q \rightarrow \infty} \int dx P_Q(x, t) f(x) = f(y(t)) \quad (9)$$

$$\lim_{Q \rightarrow \infty} \int dx P_Q(x, t) f(\sqrt{Q}(x - y(t))) = \int d\zeta P_\infty(\zeta, t) f(\zeta) \quad (10)$$

が成り立つ。

以下少しコメントをつけ加える。

**Remark 1.** (初期条件 (5) について)

$Q \rightarrow \infty$  で  $y$  のまわりに  $1/\sqrt{Q}$  ぐらいでゆらいだまま  $\delta$ -関数的になることを示している。(9)(10)に相当する結論は初期条件の family  $\{P_Q(x, 0)\}_Q$  によりけりで、なんでもかんでも成り立つわけではないし、極限の存在も保証されない。量子力学の場合は脚注に引用した (Schiff の本からの引用) ことからわかる如く対応原理が指導原理となって初期条件の形に強い制限がつく。ところが今の場合には臨界点のまわりの異常ゆらぎ等からわかるごとくそれに対応するものがないということに注意すべきである。

**Remark 2.** (極限界の存在について)

方程式 (2) の解については  $C_1(y)$  が連続でリップシッツ条件をみたしていれば、また (3) については Gauss 型の Fokker-Plank 方程式だから解が explicit に構成できる ( $C_1^{(1)}$ ,  $C_2$  が適当になめらかならば) から、局所的な解の存在等はよほど変なのをとってこない限り

伊藤秀美

大丈夫である。

**Remark 3.** (条件(8)について)

これは  $\rho(x)$  に対する条件と考えられるがたとえば

$$\rho(x) = (2\pi\sigma)^{-1/2} \exp(-x^2/2\sigma)$$

ぐらいなら

$$P_\infty(x, t) = (2\pi\sigma(t))^{-1/2} \exp(-x^2/2\sigma(t))$$

となってみたされている。ここで  $\sigma(t)$  は

$$\dot{\sigma}(t) = 2C_1^{(1)}(y(t))\sigma(t) + C_2(y(t))$$

$$\sigma(0) = \sigma$$

の解である。

**Remark 4.** (実例にあてはめた場合)

この定理を実例にあてはめると少しく不都合なことがおきてくる。例えば Scully-Lamb<sup>11)</sup> のレーザー理論では  $x = n/\Omega$  ( $n$ ; フォトン数),  $\alpha, \beta, r$  定数として ( $> 0$ )

$$w(x, r) = 0 \quad (r \neq \pm 1)$$

$$w(x, 1) = (\alpha - \beta x)x \quad w(x, -1) = rx$$

となる。(物理的にも)  $w \geq 0$  でないといけないから  $x$  の変域は

$$0 \leq x \leq \alpha/\beta$$

であり  $\mathbb{R}^1$  全体で定義されていない。この不都合さは  $P_\infty(x, t)$  が一般に無限にすそをひくことから了解できる。このような場合  $w$  の形を適当に仮定して外の方へ接続しておけばよからう。

**Remark 5.** (時間に関する一様性)

(9)を例にとろう。左辺と右辺の差は  $\Omega \rightarrow \infty$  できえるが ( $\Omega$ 有限でとめると) その差は時間に依存し、時間がたつにつれて差は大きくなる。時間について一様におさえられるのは(2)が(多次元を考える) limit cycle のないような場合に限るだろう。なぜなら

limit cycle のある場合  $\lim_{t \rightarrow \infty} f(y(t))$  は存在しないが,  $P_\Omega(x, t) \rightarrow P_\Omega^{st}(x)$  なる定常状態に (普通は) 近づくから  $\lim_{\Omega \rightarrow \infty} \lim_{t \rightarrow \infty} \int P_\Omega(x, t) f(x) dx$  は極限をもつだろうから。Ωもtも十分大きい有限の場合このことはよく念頭においておく必要がある。(例えば超放射)

**Remark 6.** (量子系)

量子系に対しても類似の結果がなり立つ<sup>12)</sup>。但し文献 12) では Heisenberg 表示をとっているのですそのままではこの議論と対応しない。(5) で  $\Omega \rightarrow \infty$  としてしまった状態(δ-関数みたいなもの)をあらかじめつくっておいて, その上で物理量の運動をおいかけるという方法をとっている。尚立場 A に立った時の量子系への拡張は文献 13) 参照のこと。

§3 証 明

まず変数を変換する。

$$\xi = \sqrt{\Omega} (x - y)$$

$$\bar{P}_\Omega(\xi, t) = P_\Omega(x, t) / \sqrt{\Omega}$$

とおけば(1)は

$$\begin{aligned} \frac{\partial \bar{P}_\Omega(\xi, t)}{\partial t} &= \Omega \int dr \{ w(y + \sqrt{\epsilon} \xi - \epsilon r, r) \bar{P}_\Omega(\xi - \sqrt{\epsilon} r, t) \\ &\quad - w(y + \sqrt{\epsilon} \xi, r) \bar{P}_\Omega(\xi, t) \\ &\equiv (\Gamma_\Omega(y) \bar{P}_\Omega)(\xi, t) \end{aligned} \tag{11}$$

となり初期条件は,

$$\bar{P}_\Omega(\xi, 0) = \rho(\xi)$$

となる。次の2つの補題が必要である。

<補題 1> (Lumer-Phillips)<sup>14)</sup>. X を Banach 空間とし A を有界な (X から X への) 線型作用素とする。このとき  $\exp(At)$  が縮小半群<sup>\*</sup>となるための必要十分条件は

---

\* 縮小とは  $\| \exp(At) \cdot x \| \leq \| x \|$  のこと。

$$\lim_{t \downarrow 0} t^{-1} (\|1 + At\| - 1) \leq 0$$

が成り立つことである。

<補題2>  $0 \leq w \leq M$ ,  $\int w(x, r) dr \leq M$  ならば\*) (11) 式の  $\Gamma_\Omega(y)$  は norm の意味で連続な  $L^1(R) \rightarrow L^1(R^1)$  の縮小半群を生成する。

証明

$\forall f \in L^1(R^1)$  に対して

$$\begin{aligned} \|(1 + t\Gamma_\Omega) f\|_1 &\leq \int d\xi \left| \left[ 1 - t\Omega \int dr w(y + \sqrt{\varepsilon}\xi, r) f(\xi) \right] \right. \\ &\quad \left. + t\Omega \int d\xi \int dr \left| w(y + \sqrt{\varepsilon}\xi - \varepsilon r, r) f(\xi - \sqrt{\varepsilon}r) \right| \right|, \end{aligned}$$

ここで  $\|g\|_1 = \int d\xi |g(\xi)|$ ,  $\int w(x, r) dr < M$  に注意すれば  $0 \leq t \leq 1/M\Omega$  に対して

$$\begin{aligned} \|(1 + t\Gamma_\Omega) f\|_1 &\leq \int d\xi \left( 1 - t\Omega \int dr w(y + \sqrt{\varepsilon}\xi, r) \right) |f(\xi)| \\ &\quad + t\Omega \int d\xi \int dr w(y + \sqrt{\varepsilon}\xi - \varepsilon r, r) |f(\xi - \sqrt{\varepsilon}r)| \\ &= \int d\xi \left( 1 - t\Omega \int dr w(y + \sqrt{\varepsilon}\xi, r) \right) |f(\xi)| \\ &\quad + t\Omega \int d\xi \int dr w(y + \sqrt{\varepsilon}\xi, r) |f(\xi)| \\ &= \int d\xi |f(\xi)| = \|f\|_1. \end{aligned}$$

この不等式と補題1より補題2は明らか。

定理の証明 (10) 式の左辺と右辺をそれぞれA, Bとする。ずれの演算子 T(a) を

$$(T(a)f)(\xi) = f(\xi + a)$$

---

\*) この条件は定理の条件(7)に含まれていることに注意せよ。

で定義する (  $f$  は連続とする )。形式的に書くと  $T(a) = \exp(a \frac{\partial}{\partial \xi})$  である。これをつかって

$$A = \int d\xi f(\xi) \{ T(\sqrt{\Omega}(y(t)-y)) e^{\Gamma_{\Omega}(y) t} \rho(\xi) \}$$

とかける。演算子

$$W_{\Omega}(t, s) = T(\sqrt{\Omega}(y(t)-y)) e^{\Gamma_{\Omega}(y)(t-s)} T(\sqrt{\Omega}(y-y(s)))$$

を使って

$$B-A = \int d\xi f(\xi) \int_0^t ds \frac{d}{ds} \{ W_{\Omega}(t, s) P_{\infty}(\xi, s) \}$$

となることがわかる。ここで  $y(0) = y$ ,  $P_{\infty}(\xi, 0) = \rho(\xi)$  を使った。  $s$  に関する微分を実行して

$$\begin{aligned} \frac{d}{ds} \{ \} &= T(\sqrt{\Omega}(y(t)-y)) e^{\Gamma_{\Omega}(y)(t-s)} (-\Gamma_{\Omega}(y) - \sqrt{\Omega} \dot{y}(s) \frac{\partial}{\partial \xi}) \\ &\quad \cdot T(\sqrt{\Omega}(y-y(s))) P_{\infty}(\xi, s) + W_{\Omega}(t, s) \frac{\partial}{\partial s} P_{\infty}(\xi, s) \\ &= W_{\Omega}(t, s) \{ -\Gamma_{\Omega}(y(s)) - \sqrt{\Omega} \dot{y}(s) \frac{\partial}{\partial \xi} + \frac{\partial}{\partial s} \} P_{\infty}(\xi, s) \\ &\equiv W_{\Omega}(t, s) QP_{\infty}(\xi, s). \end{aligned}$$

かくして

$$\begin{aligned} |B-A| &\leq \int d\xi |f(\xi)| \int_0^t ds |W_{\Omega}(t, s) QP_{\infty}(\xi, s)| \\ &\leq \|f\|_{\infty} t \sup_{0 \leq s \leq t} \|W_{\Omega}(t, s) QP_{\infty}(s)\|_1 \end{aligned}$$

を得る。ここで  $\|f\|_{\infty} = \sup_{x \in \mathbf{R}} |f(x)|$ ,  $\|f\|_1 = \int |f(x)| dx$ . 補題 2 をつかって

$$|B-A| \leq \|f\|_{\infty} t \sup_{0 \leq s \leq t} \|QP_{\infty}(s)\|_1$$

$QP_{\infty}$  のあらわな形は

$$-QP_{\infty}(\xi, s) = \Omega \int dr w(\sqrt{\varepsilon} \xi + y(s) - \varepsilon r, r) P_{\infty}(\xi - \sqrt{\varepsilon} r, s)$$



$$\begin{aligned}
 & -\Omega \int dr w(\sqrt{\varepsilon}\xi + y(s), r) P_{\infty}(\xi, s) \\
 & + (\sqrt{\Omega} \dot{y}(s) \frac{\partial}{\partial \xi} - \frac{\partial}{\partial s}) P_{\infty}(\xi, s).
 \end{aligned}$$

$w(\sqrt{\varepsilon}\xi + y(s) - \varepsilon r, r)$ ,  $w(\sqrt{\varepsilon}\xi + y(s), r)$  を  $y(s)$  のまわりに,  $P_{\infty}(\xi - \sqrt{\varepsilon}r, s)$  を  $\xi$  のまわりに展開して3次までとると, (例えば

$$\begin{aligned}
 w(y(s) + \sqrt{\varepsilon}\xi - \varepsilon r, r) &= w(y(s), r) + w^{(1)}(y(s), r) \\
 &\times (\sqrt{\varepsilon}\xi - \varepsilon r) + \frac{1}{2} w^{(2)}(y(s), r) (\sqrt{\varepsilon}\xi - \varepsilon r)^2 \\
 &+ \frac{1}{6} w^{(3)}(y(s) + \theta \sqrt{\varepsilon}(\xi - \sqrt{\varepsilon}r), r) (\sqrt{\varepsilon}\xi - \varepsilon r)^3, \\
 &\quad (0 \leq \theta \leq 1)
 \end{aligned}$$

の如く。) (2), (3) をつかって  $|B-A|$  は

$$\varepsilon^{\frac{m}{2}} \left| \int dr \int d\xi r^i w^{(j)}(y(s) + \eta\sqrt{\varepsilon}(\xi - \mu\sqrt{\varepsilon}r), r) \xi^k \frac{\partial^{\ell}}{\partial \xi^{\ell}} P_{\infty}(\xi - \sqrt{\varepsilon}r\nu, s) \right| \equiv |U|$$

$$0 \leq \eta, \mu, \nu \leq 1 \quad 1 \leq m \quad 0 \leq i \leq 6, \quad 0 \leq j, k, \ell \leq 3$$

の有限和でおさえられる。ここで  $w^{(j)}(y, r) = \partial^j w(y, r) / \partial y^j$ .

仮定(7), (8) を使って

$$\begin{aligned}
 |U| &\leq \varepsilon^{\frac{m}{2}} \int d\xi \int dr |r|^i |g(r)| \left| \xi^k \frac{\partial^{\ell}}{\partial \xi^{\ell}} P_{\infty}(\xi - \sqrt{\varepsilon}r\nu, s) \right| \\
 &\leq \varepsilon^{\frac{m'}{2}} \int dr \int d\xi |r|^{i'} |\xi|^{k'} g(r) P_{\infty}(\xi, s) \text{ の有限和}
 \end{aligned}$$

$$0 \leq i' \leq 9 \quad 0 \leq k' \leq 3, \quad 1 \leq m'$$

したがって  $\|QP_{\infty}(s)\|_1 \leq C'\varepsilon^{\frac{1}{2}} \rightarrow 0$ .

次に(9)を示そう。すでに

$$\int d\xi |T(\sqrt{\Omega}(y(t) - y) e^{\Gamma_{\Omega}(y)t} \rho(\xi) - P_{\infty}(\xi, t))| \rightarrow 0 \quad (\Omega \rightarrow \infty)$$

を示した。これより

$$\| e^{\Gamma_{\Omega}(y)t} \rho - T(\sqrt{\Omega}(y-y(t))) P_{\infty}(t) \|_1 \leq \| T(\sqrt{\Omega}(y-y(t))) \|$$

$$\| T(\sqrt{\Omega}(y(t)-y)) e^{\Gamma_{\Omega}(y)t} \rho - P_{\infty}(t) \|_1 \rightarrow 0$$

したがって

$$\begin{aligned} (9) \text{ の左辺} &= \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \int d\xi f(\sqrt{\varepsilon}\xi + y) e^{\Gamma_{\Omega}(y)t} \rho(\xi) \\ &= \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \int d\xi f(\sqrt{\varepsilon}\xi + y) T(\sqrt{\Omega}(y-y(t))) P_{\infty}(\xi, t) \\ &= \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} \int d\xi f(\sqrt{\varepsilon}\xi + y(t)) P_{\infty}(\xi, t). \end{aligned}$$

$|f| < M$  だからルベグの収束定理より積分と極限がひっくり返せて

$$\begin{aligned} &= \int d\xi \lim_{\varepsilon \rightarrow 0} f(\sqrt{\varepsilon}\xi + y(t)) P_{\infty}(\xi, t) \\ &= \int d\xi P_{\infty}(\xi, t) f(y(t)) = f(y(t)) \quad \text{Q. E. D.} \end{aligned}$$

終わりに有益な議論をしてくださった岸本晶孝氏, 中込照明氏, 及びはげましをいただいた長谷川洋先生に感謝します。

## 文 献

- 1) L. van Hove, Physica **21**, (1955), 517; **23** (1957), 441.
- 2) E. B. Davies, Comm. Math. Phys. **39** (1974), 91.  
J. V. Pulè, Comm. Math. Phys. **38** (1974), 241.
- 3) N. G. van Kampen, Can. J. Phys. **39** (1961), 551.
- 4) R. Kubo, K. Matsuo and K. Kitahara, J. Stat. Phys. **9** (1973), 51.
- 5) L. I. Schiff, Quantum Mechanics (McGraw-Hill) p. 17.
- 6) マスロフ, 摂動論と漸近的方法 (岩波) 大内他訳
- 7) K. Hepp. Comm. Math. Phys. **35** (1974), 265.

伊藤秀美

- 8) M. Suzuki, Prog. Theor. Phys. **55** (1976), 383.
- 9) K. Tomita and H. Tomita, Prog. Theor. Phys. **51** (1974), 1731.
- 10) K. Hepp, Lecture note given at the international school in Mathematical Physics, Camerio (1974).
- 11) M. O. Scully and W. E. Lamb jr. Phys. Rev. **159** (1967), 208.
- 12) H. Ito and T. Nakagomi, Progress 投稿中
- 13) M Suzuki, Prog. Theor. Phys. **55** (1976), 1064.
- 14) G. Lumer and R. S. Phillips, Pacific J. Math. **11** (1961), 679. 定理 2.1 と補題  
3.2 の系